

ジョン・ボウルビイの愛着理論 — その生成過程と現代的意義 —

中 野 明 徳

【要 旨】

ジョン・ボウルビイの愛着理論は、マターナル・デプリケーションの研究から始まり、精神分析学に比較行動学を取り入れて提唱された。愛着行動とは乳幼児が母親に接近する本能的行動であり、ボウルビイは愛着人物との分離に伴う不安や恐怖、それに愛着対象喪失によって起きる悲哀の過程を精神病理学的に追究した。子ども虐待が急増する今日、愛着理論は母子臨床に貢献するであろう。母子を結ぶ絆は「愛着」だけではなく、パリントの「一次愛」や土居健郎の「甘え」などの概念もあり、こうした精神分析理論と繋いで治療論を展開することが今後期待される。

【キーワード】

マターナル・デプリベーション、愛着行動、愛着人物との分離、
愛着対象喪失、甘え

I. はじめに

本小論はジョン・ボウルビイ (John Bowlby, 1907-1990) が唱えた愛着理論 (attachment theory) を取り上げ、この理論の生成過程と現代における意義を論じたものである。ボウルビイは精神分析家としてスタートし、彼の愛着研究は1950年代のマターナル・デプリベーション (母性的養育の剥奪) の研究から始まり、1969年に大著『愛着行動』を発表したが、彼は比較行動学を取り入れたために精神分析家から遠ざけられてしまった。しかし、彼の愛着理論は、1970年代から1980年代の間、子ども虐待 (身体的虐待や性的虐待) の増加から関心がもたれるようになり、日本でも1990年以降、子ども虐待が増加するにつれて愛着障害への関心が高まってきた。本論では、ボウルビイの愛着理論がいかにして生まれたのかを通覧する。次に、この理論を土居健郎の「甘え」理論等と比較しつつ評価し、現代における意義を考察する。

II. ジョン・ボウルビイの生涯

ジョン・ボウルビイの生涯についてホームズ (Holmes, 1993) を参考にしてまとめておこう (表1参照)。ジョン・ボウルビイは1907年生まれ、当時父親は52歳、母親は40歳で、両親はすでに中年に達していた。父親のアンソニー (Sir Anthony Bowlby, 1855-1928) は外科医で准

表1 ジョン・ボウルビィの年譜

西暦	歳	出 来 事
1907	0	2月26日、父親 Anthony 52歳、母親 May 40歳の第4子、次男として出生
1914	7	第一次世界大戦、寄宿制の学校に入学
1916	9	ダートマス兵学校入学
1925	18	ケンブリッジ大学、トリニティ・カレッジの医学生として入学
1928	21	父他界し、不適応児のための進歩的な学校の教員となる（-29年）
1929	22	ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジ病院に在籍すると同時に、Institute of Psycho-Analysis に属して Joan Riviere 女史から分析を受ける
1933	26	医師の資格を取得、モーズレイ病院で成人精神医学を学ぶ
1936	29	ロンドン児童相談所に勤務（-40年）
1937	30	分析家の資格を取得、スーパーバイザーは Melanie Klein
1938	31	Ursula Longstaff と結婚、2男2女をもうける
1940	33	陸軍所属精神科医、士官選考局に従事（-45年）
1946	39	タビストック・クリニックの児童精神医学コンサルタント、副院長、児童及び両親部門長（-72年）、論文“Forty-four juvenile thieves”発表
1950	43	世界保健機関 WHO の精神衛生コンサルタント（-72年）
1951	44	“Maternal Care and Mental Health” 出版
1952	45	Lorenz の“King Solomon’s Ring”を読み、比較行動的研究法を知る
1953	46	“Child Care and the Growth of Love”（普及版）出版
1956	49	英国精神分析学会で、Winnicott を助けて副会長になる（-1961）
1969	62	3部作第I巻“Attachment”出版
1973	66	3部作第II巻“Separation”出版
1979	72	“The Making and Breaking of Affectional Bonds”出版
1980	73	3部作第III巻“Loss”出版
1988	81	“A Secure Base”出版
1990	83	“Charles Darwin, A New Biography”出版、9月2日他界

男爵の爵位を授与されていた。ジョンの祖父トーマス (Thomas) はタイムズ紙の海外記者であったが、アヘン戦争の最中に北京で暗殺された。その時、父アンソニーは8歳で、自分の母親が再婚しない責任を感じて、母親が死去するまで結婚をせず、伴侶を探し始めたのが40歳の時で、名門の令嬢である母メイ・モスティン (May Mostyn) と知り合った。メイは貴族ヒュー・モスティン (Hugh Mostyn) の長女であり、モスティン氏は教会の牧師であった。

ジョンの両親は子どもの養育を多数の使用人に任せきりであった。子どもが6人いて、年長の2人の娘ウィニー (Winnie) とマリオン (Marion) は、幼い頃から音楽に秀でていたが、2人とも生涯結婚しなかった。次のトニー (Tony) とジョンは13ヵ月違いで、兄のトニーは母親のお気に入りでもうまくやってのけ、有能な実業家となって父親の称号を継いだ。発達の少し遅れた弟ジム (Jim) は農場で働いたこともあったがうまくいかず、生涯結婚しなかった。末子の妹エヴェリン (Evelyn) はジョンと同様に精神分析に興味をもち、経済学者ヘンリー・ブラウン (Sir Henry Brown) と結婚し、彼らの娘ジュリエット・ホプキンス (Juliet Hopkins) は児童心理療法家となった。エヴェリンは、ロンドンの邸宅での生活はあまり楽しいものではな

かったと回想している。その生活は厳しい礼儀作法、ユーモアに欠けた家庭教師、ハイドパークでの行列のような散歩といった味気ないものであった。父は釣りや猟を好み、母も自然生活を好んだので、ジョンとトニーも熱烈な自然愛好家となった。父は子どもたちに動物のニックネームをつけ、ジョンは“ジャッカル”、トニーは“ゴリラ”、エヴェリンは“ネコ”と呼ばれ、この一家の動物好きがうかがわれる。

ジョンが7歳の時に第一次世界大戦が始まり、兄とともに寄宿制の学校に入れられた。戦争が終結した頃、ジョンは海軍士官候補生としてダートマス兵学校に入学した。トニーは父親の後を継いで外科医になることが期待されたがそむいたので、ジョンに医学への道が開かれた。ジョンは兵学校をやめてケンブリッジ大学を志願して、1925年にトリニティ・カレッジの医学生として入学が許可された。ジョンが21歳の時に父親が他界したので、自由に自分の進路を選択でき、臨床医学の研究のためにロンドンへ直行する代わりに、ニール (Neill) の系統を引く不適応児のための進歩的な学校の教員になった。ここでジョンは障害児と出会い、障害の原因が不幸な幼児期にあると考えるようになった。この学校で働いていたジョン・アルフォード (John Alford) がジョンにロンドンで精神分析家として修業を積むように勧めた。

ボウルビイが医学研究を始めたのが1929年、22歳の時で、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジ病院に在籍する一方、その頃注目され始めた児童精神医学者になるために、Institute of Psycho-Analysis に属して、メラニー・クライン (Melanie Klein) の同僚であるリビエール (Riviere) 女史から分析を受けた。彼は1933年に医師の資格を取得後、モーズレイ病院で成人精神医学を学び、1936年にロンドン児童相談所に勤務した。1937年に分析家の資格を取得して、スーパーバイザーであるクラインと一緒に児童分析の仕事をはじめたが、ここで衝突が起こった。クラインが患者の障害の原因として、環境的原因にさほど関心を示さなかったからだと言われている。ボウルビイは、神経症の発生要因として幼児期初期における環境要因、特に母親との離別や家庭崩壊を考えた。1940年にボウルビイは陸軍精神科医として採用されて、将校たちを選別する集団に配属され、そこにはウィルフレッド・ビオン (Wilfred Bion) がいた。その頃、アンナ・フロイト (Anna Freud) とクラインとの間で大論争が起きたが、ボウルビイは独立派 (中間派) のメンバーとして、精神分析学会をまとめた。かつて陸軍で組織された精神分析家集団は、戦後タビストック・クリニックに集まり、ボウルビイが副所長として選ばれ子ども部門を新設する任務が課せられた。

ボウルビイは1946年、児童相談所で働いた経験から、“Forty-four juvenile thieves” (『44人の盗癖児』)の研究をまとめ、良好な養育が欠けていることを強調した。この論文によって1950年、WHO (世界保健機関) から孤児の精神衛生に関する報告書の執筆を依頼されることになった。彼は欧米の児童発達論の専門家と面談して、世界的な文献評論“Maternal Care and Mental Health” (邦題『乳幼児の精神衛生』, 1951)を出版し、この普及版“Child Care and the Growth of Love” (『育児と愛情の成長』, 1953)はベスト・セラーになった。ボウルビイにアタッチメントの概念がひらめいたのは1952年だといわれている。この頃、彼は比較行動学者ローレンツ (Lorenz) の“King Solomon's Ring” (『ソロモンの指輪』)を読み、比較行動的研究方法が精神分析的理論の科学的根拠を提供し得ると信じた。

ボウルビイは、第二次大戦後も精神分析学会での活動を続け、1956年から1961年にかけてウィニコット (Winnicott) を助けて副会長として運営を担ったが、比較行動学を精神分析学に持ち込んだことは評価されなかった。彼は1960年代から学会とは疎遠になり、記念すべき3部作、第I巻“Attachment” (邦題『愛着行動』, 1969)、第II巻“Separation” (邦題『分離不安』, 1973)、第III巻“Loss” (邦題『愛情喪失』, 1980)に没頭した。ボウルビイは数々の賞を受けたが、アメ

リカではメアリー・エインズワース (Mary Ainsworth) の研究によってアタッチメント理論に対する関心が高まった。1980年の1年間、彼はロンドン大学ユニバーシティー・カレッジの精神分析学における Freud Memorial Professor に任命された。ここでの講義や海外での講演は、“The Making and Breaking of Affectional Bonds” (邦題『母子関係入門』, 1979)、“A Secure Base” (邦題『母と子のアタッチメント 心の安全基地』, 1988) として出版された。彼は最後に “Charles Darwin, A New Biography” (1990) を出版して他界した。

Ⅲ. マターナル・デプリベーションの研究 (1951)

ボウルビイ著 “Maternal Care and Mental Health” (1951) は2部に分かれ、maternal deprivation (母性的養育の剥奪) によって起きる不幸な結果と、その防止が述べられている。この研究は「戦後、家庭のない子どもは何を必要としているか」ということから始まった。ここでいう家庭のない子どもとは、孤児や、何かの理由で家庭から離れて養家や施設などで集団的に保護されている子どもである。なお、以下の下線は筆者による。

1. 母性的養育の剥奪による不幸な結果

1) 精神的不健康の原因

ボウルビイは、成人や子どもに精神分析治療を施すようになって以来、「幼児期における両親の養育内容が子どもの将来の精神面に著しい影響を与える」という認識が広がったという。この新しい知識のおかげで、「欧米の児童相談所員たちは、精神衛生の主要な問題に関して一致した見解をもつようになり、その結果、事例研究のやり方、調査方法、診断基準、治療計画などは国によって大差はなく、とりわけ病因についての理論はまったく同じだといってよい」と述べ、乳幼児と母親との人間関係が精神衛生の根本であると強調する。

もし母親 (あるいは母親代わりとなる者) が子どもに必要な愛情をそそがない場合は、一種の喪失状態だと考えられるので、ボウルビイはこのような子どもの状態を「母性的養育の剥奪」と名づけた。たとえ母親によって育てられなくなったとしても、代理者は多少とも子どもに安定感を与えるので、「部分喪失」と呼ぶ。このような事態は、施設や乳児院や病院などでみられ、急性の不安感、過度の愛情欲求、強い恨み、最後には罪意識や抑うつ状態が起こる。これらの情緒や動因はきわめて強く子どもは抑制が困難なので、ついには神経症や不安な性格が形成される。

ボウルビイは、このような見解が多くの臨床的資料によって導かれたものであると述べる。統計的関心の強い研究者は、「欠損家庭」(broken home) という概念を用いて、子どもの不適応と家庭状況との間に密接な関係があることを証明しているという。しかし、「欠損家庭」という概念は学問的には適当でないので、ボウルビイは「親子関係の障害」という表現が適切であろうという。なお、彼は「父子関係についてはこの論文で特に検討するつもりはない。なぜなら、ほとんどすべての問題は、子どもと母親との関係に帰することができるからである」と述べる。

2) 母性的養育の剥奪についての考察

ボウルビイは幼児期における母性的養育の剥奪が発達に著しい影響を及ぼす事実が、多くの資料によって証明されるとし、その資料を次の3つに分類した。①直接的な研究: 施設、病院、里家において、幼児の精神衛生とその発達を直接観察する方法。②回顧的研究: 心理的に欠陥をもっている青年や成人について、その幼児期の生活史を調査する方法。③追跡的研究: 幼児期の喪失体験によって悪影響を受けたと思われる子どもたちの生活を追跡的に研究する方法。このうち直接的な研究が最も多く、母性的養育を喪失した子どもの発達は例外なく遅れ、身体的にも精神的に

も不健康の兆候を示した。回顧的研究や追跡研究は、幼児の受けた傷が永続的で、回復が非常に困難であることを明らかにしたという。未解決な問題は、同じ状況におかれても悪影響を受けない子どもがいることであり、ボウルビイは遺伝的な生物学的問題を解明する前に、愛情喪失が起こった時の子どもの年齢、時期、その程度という3つの要因の役割に注目した。

直接的研究の例として挙げられた、スピッツ (Spitz, R.A.) は6カ月から12カ月までの乳児を調査して、母親との離別によって抑うつを示したと報告し、幼児に見られる無関心、沈黙、不幸感、無反応を示す現象を“anaclitic depression” (『依存性うつ』) と呼び、発達の障害になるとみた。3歳以下の幼児や、3歳から5歳までの大多数の幼児は、喪失によって悪影響を受けやすいが、5歳から8歳の幼児は比較的害を受ける者が少ない。それまで母親と好ましい関係を保っていた者ほど、離別の苦悩に耐える力をもつとみられた。

回顧的研究として、ボウルビイ自身の「44名の盗癖児」の研究がある。盗癖群には愛情欠損的性格 (affectionless characters) と名づけられる少年が14名発見されたが、統制群にはなかった。盗癖群には生後5年間に母親あるいは里親と完全な離別か長期間の離別 (6カ月以上) を経験した者が17名あったが、統制群は2名にすぎなかった。愛情欠損的盗癖児と離別の体験には密接な関係が認められ、臨床的に遺伝よりも母親との長期離別に最大の原因があるとみられた。

追跡研究では、施設で保護されて里子になった者と母親のもとから里子になった者を比較すると、乳幼児期を施設で過ごした幼児が発達面で悪影響を受けているという報告がある。

このような資料をもとにボウルビイは、「長期にわたる母性的養育の剥奪は、子どもの性格に、また子どもの全生涯に、著しい影響を与えるものと考えられる。」このような判断は、胎児に対する風疹の悪影響や、乳児のビタミンD不足と同様に危険であるにもかかわらず一般的に認められていない」という結論を出した。

2. 母性的養育の剥奪の防止

ボウルビイは精神衛生の本質として、「乳幼児が母親 (あるいは母親代理者) と親密で継続的な人間関係を持ち、これによって両者が満足と喜びを経験することである」という。このためには両者が相手の人格を自己の中に取り入れる必要があり、そこにはお互いに楽しみと一体感が生まれるとし、「家庭に勝る場所はない」という表現で家庭の意義を強調している。問題家庭から子どもを引き離すことをできるだけ防止し、最悪の事態においても、何らかの対策を講じなければならない。そこでボウルビイは「この問題に関係しようとする者は、心理学や人間関係の精神病理学を習得し、無意識的動機を分析して、それを改変する力をもたなければならない」と強調する。ボウルビイは代用家族として、養子縁組、養育ホームとケースワークについて詳しく述べている。家庭を離れた子どものうち、精神科治療が必要である場合もあり、ケースワーカーを援助するために児童精神科医が必要であり、ケースワークには精神分析学を取り入れる必要があるとも指摘している。

IV. 『愛着行動』 (1969)

ボウルビイは1956年から「母性的養育の剥奪が一体どのようにして精神障害を引き起こすのか」という問題に取りかかり、1969年に3部作第I巻“Attachment”を完成させた。母親の愛情と母親の存在に対する子どもの渴望は、食べ物に対する飢えと同様に強いものであり、母親の不在によって引き起こされる喪失感や怒りは非常に大きいと強調した。彼の研究は、「母親から引き離されている期間の子どもたちの反応を注意深く観察すると、将来の人格障害の何かが探知でき

るのではないか」というもので、母親との分離後に子どもが示す反応、再び母親のもとに戻された場合に示す反応を詳細に記録しなければならないとした。

1. 研究課題

ボウルビィは、本書の冒頭に「私の研究はすべて精神分析学の枠組みの中で展開されている」と述べた後、彼の研究の立場を述べる（第1章）。精神分析家がつ乳幼児の概念は、比較的年長の被験者から回顧的に再構成されたものである。それに対してボウルビィは、乳幼児が母親の存在するとき、あるいは不在のときに、どのような反応を示すかを観察して、そこから前向きに外挿する方法をとる。この変更によって、発達しつつあるパーソナリティにとって病原性があると思われる事象（心的外傷体験）から出発して問題を展開できるという。

ここで論じられている病原の影響とは、生後6カ月頃から6歳までの間に母性の人物を喪失する現象であり、データは幼児の行動を観察することから得られたものである。ボウルビィは、乳児期に知覚しうる「行動パターン」があって、そこには純粹に精神的な状態が発達していく根源的資質があり、後に情動、感動、幻想などの「内的なもの」としてみなされるものは、すべてこの地点へ還元できると考える。伝統的な精神分析的方法と異なって、母親の存在あるいは不在の状況において、他の種（species）の動物がいかに反応するかという比較行動学の概念を利用する。ここで検討される新概念は、言語が発生する以前の時期に形成される、親密な社会的絆に関連したものである。ボウルビィが採用した研究方法をまとめると、①予見性のある考察方法を取り入れる、②病原とその結果に焦点をあわせる、③幼児を直接観察する、④動物のデータを用いることである。ボウルビィは回顧法（retrospective method）の限界を論じ、検証可能な予測ができるためには、歴史的方法に自然科学的方法を加えなければならないとした。

ボウルビィは、フロイトの本能的な心的エネルギーのモデルは当時の物理学の理論から創始されたものであり、臨床的観察ではこのモデルは必要とされていないと批判する。他方、対象関係的モデルは臨床的経験から引き出されたものであり、クライン、バリント（Balint）、ウィニコット、フェアバーン（Fairbairn）らが貢献したが、4人はそれぞれ新しい型の本能理論に依存していると述べる。心的エネルギーモデルは無生物の閉鎖システムに適用されるものであり、今日の生物学では開放システムとしての生きた生活体が強調されるとして、ボウルビィはフィードバックの概念を用いることで、活動を開始する条件と同様に活動を終結させる条件を見ていくと観察可能なデータが得られ、検証可能になるという。彼は制御理論（control theory）と進化論の術語を用いることで、精神分析学を生物学と連結し首尾一貫した説明ができると主張する。

第2章でボウルビィはこれまでの観察研究を紹介する。母親とある程度安定した関係を保ち、以前に母親から分離された経験のない生後15カ月から30カ月の子どもが、母親と分離した状態には一連の行動が共通に示される3段階があるとして、反抗（protest）、絶望（despair）、脱愛着（detachment）と名づけた。

①反抗の段階：直ちに始まることもあれば、遅延することもあり、数時間から1週間以上も継続する。子どもは母親を失ったことに激しい悲しみを見せ、母親をとりもどそうと努力し、大声で泣き、ベッドを揺り動かし、転がり回り、母親が存在すると思われる場所を凝視する。

②絶望の段階：子どものために尽くしてくれるあらゆる人物を受け入れなくなるが、なおも子どもは、いなくなった母親のことで心が奪われている。行動には絶望の状態がますます強く示され、積極的な身体運動は減少するか、あるいは終息し、単調な声で泣いたり、断続的に泣いたりする。引っ込み思案で、非活動的になり、周囲の人々に何の要求も示さず、深い苦悩の状態にある。これは静寂段階（a quiet stage）であって、悲しみの減少を示しているのではない。

③脱愛着の段階：子どもが周囲に興味を示すので、しばしば回復のしるしとして歓迎される。子どもは看護者を拒否せず、養育や、食べ物やおもちゃを受け入れ、微笑し、かつ社交的に見える。この変化は満足に見えるが、子どもの母親が訪ねてくると、必ずしもすべてがうまくいっていないことが明らかになる。というのはこの年齢で正常にあらわれる強い愛着行動が驚くほど欠けている。子どもは母親を歓迎するどころか、母親を知らないかのように気乗りしない顔をして、母親に対する興味を失ったように見受けられる。この段階を言い表す用語として、「拒否」(denial)、「引っ込み」(withdrawal)は放棄され、「愛着」(attachment)の自然な対応概念である「脱愛着」(detachment)という用語が選ばれた。

2. 本能的行動

ボウルビイは制御理論や比較行動学(動物学者による動物行動の研究)を用いて、フロイトとは異なる本能理論を検討する(第3章)。行動には多くの規則性があり、規則性の一定のものは常に顕著であり、種の生存に重大な役割を演じるものを「本能的」(instinctive)と呼ぶ。行動が生得的(innate)か獲得的(acquired)かという議論は、現在の考えでは非現実的であり、新しい術語が必要だという。環境の要因によって影響を受けない生物学の特徴は「環境的に安定したもの」、発達過程で環境の要因に多く影響されるものは「環境的に可変なもの」と名づけると、従来本能的と記述されてきた行動は環境的に安定したものである。ボウルビイは、「人や高等動物の本能的行動は安定した動きではなく、特殊な環境における特殊な個体による独特な遂行活動であり、しかも特異でありながら何らかのはっきりしたパターンに従い、多くの場合、種にとつて明らかに利益になる結果となる遂行活動である」と説明する。

ボウルビイの説明によると、行動システムが環境的に安定もしくは可変である度合は、肉食動物や霊長類では多くのシステムが可変である。どの場合にもそのシステムが適応する特殊な環境があり、それを「適応性のある環境」(environment of adaptedness)と呼ぶ。本能システムは、原則として適応性ある環境において、その種の生存を促進するように構造化されている一方、それぞれのシステムは、それが関係している環境の特殊な部分によって異なっている。ボウルビイは、ダーウィンの『種の起源』(1859)の影響を受け、「環境的に安定した行動システムは、それぞれの種の生存にとって、形態的構造と同様に必要である」と述べる。

第5章でボウルビイは「本能的行動を媒介する行動システム」を論じる。行動はフィードバックによってコントロールが可能になるので、行動システムは目標指向的(goal-directed)というよりも、目標修正的(goal-corrected)という表現が適切であるという。システムの簡単な型は固定活動パターン(fixed action pattern)であり、乳児期では重要な役割を演じる。探索すること(rooting)、つかむこと(grasping)、泣くこと(crying)、微笑すること(smiling)などは固定的活動の例であるが、いずれも環境からのフィードバックによる運動と結合されると、より一段と融通性のある目標修正的行動が生じる。しかし環境は非常に複雑であるので、脳が環境の作業モデル(working models)を作り上げると仮定し、ボウルビイはこうしたモデルが精神分析理論の「内的世界」(internal worlds)と同じであると主張する。

ボウルビイは「評定と選択：感情と情動」(第7章)で、人間においては評価(appraisal)の過程で情緒(affects)、感情(feelings)、情動(emotions)が意識にのぼり、それが行動の原因になり得ることを認める。しかし彼は「感情を表す語が、特定の種類の活動を伴うことを認識するのに障害となる場合は、それを放棄し、行動を表す語(language of behaviour)によって一時的に置き換えられる方が適切である」と述べ、感情よりも行動を重視する。

第8章「本能的行動の機能」で、ボウルビイは用語の問題に触れ、「本能的」(instinctive)と

いう形容詞は有用であるが、「本能」(instinct) という名詞が用いられる時は障害がでてくるといふ。本能的行動は特殊な環境下で、連鎖状あるいは階層的序列をなした状態で統合された行動システムの活動化の結果であり、原則として生存にとって価値ある帰結を達成すると考えられる。ところが本能という用語は、「造巢本能」とか「性本能」のような、本能的行動の予測可能な結果をさすこともあれば、「生殖本能」のような生物学的機能をさすこともあるし、「恐怖の本能」のように、一般的行動に伴う情動をさすこともあり混乱しているという。それゆえボウルビイは本能や動因という概念を使用しない。精神病理学で使用された、欲求 (need)、願望 (wish)、目標 (aim)、目的 (purpose) という用語は、いずれも種の生存に必須なものとして限定されていないので、「予測可能な結果」を述べるときには、「設定目標」(set-goal) という用語が用いられる。例えば、乳児にとっての「設定目標」は母親とできる限り接近することである。

第10章で発達の敏感期、刻印づけが述べられる。環境の変化に敏感である期間はしばしば限られた期間であり、臨界期 (critical phase) または敏感期 (sensitive period) と呼ばれる。成長後の本能的行動によって取られる形式の大部分が早期における敏感期によって決定されるという考えは、フロイトのいう固着 (fixation)、およびリビド体制段階 (stage of libidinal organization) という概念で示されている。「刻印づけ」(imprinting) という言葉はローレンツの研究から発するもので、学習過程とは異なる多くの特徴をもつ。つまり、①ライフサイクルにおける1つの短い臨界期に間のみ生起し、②非可逆的であり、③超個体的学習 (supra-individual learning) であり、④まだ発達していない行動パターンに影響を与える (例えば性的パートナーの選択)。しかし、臨界期はローレンツが考えたほどはっきりしたものではないことが明らかにされたとして、ボウルビイはダーウィン理論から、「本能的行動はある条件によって活動化され、その他の条件によって終結にまで導かれるような行動的構造の一連の結果 (outcome) である」と定義する。

3. 愛着行動

ボウルビイは原著で130頁余りにわたって本能的行動を検討した後、愛着行動 (attachment behavior) について展開する。「母親に対する子どもの結びつき」について (第11章)、フロイト説では、乳児が人間に興味をもち愛着を示すのは、母親が子どもの生理的欲求 (食べ物や暖かさ) を満たすからであり、要求の充足が乳児の学習の根底にあるというもので、ボウルビイはこれを「二次的動因説」(theory of secondary drive) と呼ぶ。ボウルビイは本能的行動を制御する行動システムに基づいて1958年に新仮説を提起し、母親と子どもの結びつきは、母親をある結果をもたらす対象とみなして接近する行動システムの所産だとした。この愛着行動は交配行動 (mating behaviour) や親としての行動 (parental behaviour) と同様に、重要な社会的行動の1つとみなされる。この行動システムは、特に母親との相互作用の結果として、乳児の中に発生する。愛着をつかさどる行動システムの発達が、ある段階に達したときに、母親に対する接近が目標とされると考えられ、この仮説の初期段階では、5つの行動パターン (吸う sucking、しがみつく clinging、後を追う following、泣く crying、微笑む smiling) が愛着に寄与する。これら5つの行動パターンは、生後9カ月から18カ月の間に、よりいっそう複雑な目標修正的システムに統合されて、母親に対する子どもの接近が持続されやすくなると考えられる。ボウルビイはこの新仮説を「愛着行動制御説」(control theory of attachment behaviour) と呼ぶ。他者を求める接近行動はどんな種類のものであろうと「愛着行動」とみなし得るもので、それに報いる親の行動は「養育行動」(caretaking behaviour) と名づける。

人間の愛着行動は類人猿と比較して、母親を認知するまでにかなりの時間がかかり、動けるよ

うになって初めて仲間を求める。人間の子どもは母親にしがみつくと以前に、他の人間と自分の母親とを見分けることができる。生後4カ月頃の乳児は、自分の母親と他人に対して異なる反応を示し、母親を見つめる時には微笑みが現れ、他人よりも長く母親を凝視し、知覚的弁別が可能になっている。6カ月児では、母親が部屋を去るとき、乳児が泣くとか、母親の後を追い求める。人間の子どもの愛着行動の開始は4カ月に達しない頃から12カ月以後にいたるまで、かなり年齢差がある。生後2年目あるいは3年目の愛着行動は、1年目の終わり頃に比べて強度が弱く、頻度も少ない。しかし、子どもの知覚範囲が増大し、周囲の認識が向上すると、愛着行動を引き起こす事情が変化する。青年期になると、両親に対する愛着行動は弱まり、親以外の成人が親と同様に重要な人物となる。ボウルビイは、成人期の愛着行動が幼児期における愛着行動の延長であることを理解するには、成人の愛着行動が引き起こされやすい諸事情を参考にすることが必要で、みだりに「退行的」という形容詞を用いると、人生において愛着行動が果たしている重要な役割を見落とすことになると指摘する。

ボウルビイは「愛着行動の性質と機能」(第12章)が、哺乳類と人間において本質的に同一であるという。アカゲザルを用いたハーロウ(Harlow)の実験に見られるように、人間以外の哺乳動物においても食物、温度、性といった報酬をとまわらない対象に対しても愛着行動が形成される事実がある。人間の乳児の発声や微笑は、成人によって社会的関心が払われると頻度と強度が増大し、ボウルビイは「人間における愛着行動は食物や保温の報酬がなくても発達し得るものである」と主張する。彼は「人間の赤ん坊における愛着行動の発達過程と、特定人物に対する関心の形成過程は、他の哺乳類や鳥類における刻印づけと名づけられる行動の発達過程とかなり類似している」と結論を下す。愛着機能は、略奪者(predator)からの保護、生存のために必要な活動を母親から学ぶ機会を提供することであるという。

「依存」(dependence, dependency)という用語に対して、ボウルビイは使用を避ける。生後数週間の乳児は母親にまったく依存しているが、必ずしも愛着を持っているとはいえないとし、「母性的人物に依存することと、愛着を持つことは非常に異なった出来事である」と指摘する。「依存」と「愛着」の違いについて、「依存はある個人が生存のために他者に頼るという意味を持ち、この言葉には機能的意味が含まれている。ところが愛着は行動の一形態であって純粋に記述的である。これらの異なった意味内容のゆえに、依存は誕生時に最高の状態で、その後成熟期にいたるまで徐々に減少するのに対して、愛着は誕生時にまったく欠如しており、その後約6カ月間もそれほど現れない」と説明する。一般的な評価では、依存的と呼ばれることは軽蔑を意味するが、人物に愛着することは必ずしも恥じるべきことではないともいう。

また、ボウルビイは愛着行動と性的行動とを概念的に区分する。その理由として、2つのシステムは相互に独立していること、これらのシステムが向けられる対象がかなり相違していること、それに敏感になる時期が年齢的に異なることをあげている。とはいえ、人間において、愛着行動、親としての行動、性的行動の重複は、普通に認められる現象であるともいう。

ボウルビイは「愛着行動に対する制御システム」を考察するに当たり(第13章)、母子間でダイナミックな均衡を保つための行動を4種類あげる。①子どもの愛着行動、②愛着とは相反する子どもの行動(例、探索行動や遊び)、③母親の養育行動、④親としての養育行動とは相反する母親の行動(例、一般的な家事労働)。①と③の行動は機能面に関しては同質的であり、②と④は異質的であるという。

愛着行動を媒介する行動として、次のものがある。①母親の所在を知ることができる定位行動(orientational behaviour)は、母親の動きを目で追ったり、耳で確かめたりする行動である。②母親を子どもの方へ引き寄せる効果がある信号行動(signaling behaviour)は、泣き叫ぶ、微

笑む、喃語をいう、成長すると呼び求めるなど、母親の関心を得ようとする行動である。③子どもを母親の方へ近づける効果がある接近行動 (approach behaviour) は、第1に探し求める (seeking)、後を追う (following) など運動手段を用いた接近行動そのもの、第2にしがみつuki行動、第3にやや理解しにくい非食事的吸引 (non-nutritional sucking) や乳首いじり (nipple-grasping) がある。

4. 人間における愛着行動の個体発生

ボウルビイは愛着行動が人間の乳児において発達する過程を次の4段階に分けて論じる。

第1段階 人物弁別を伴わない定位 (orientation) と発信 (signals) : この段階は誕生から少なくとも8週まで、一般的には12週頃まで続く。乳児は周囲の人に対して、定位、視線による追跡運動、つかむ、手を伸ばす、微笑する、喃語をいう (babbling)、泣き叫ぶ。こういう行動が相手の行動に影響して、乳児のそばにいる時間が長くなる。

第2段階 一人 (またはそれ以上) の弁別された人物に対する定位と発信 : この段階は生後6カ月ころまで続き、人に対する親密な行動が母性的人物 (mother-figure) に対して顕著になる。聴覚刺激や視覚刺激に対する分化した反応が12週以後明確になる (例、対眼接触 eye-to-eye contact)。生後3カ月から6カ月の間は、乳児の大部分が愛着行動を発達させるのに適した感覚鋭敏期 (sensitive phase) にあり、容易に弁別された対象に愛着を形成する。

第3段階 発信ならびに動作の手段による弁別された人物への接近の維持 : この段階は生後6カ月から7カ月の間に始まり、2歳ころまで続く。乳児はますます区別して人に接するようになり、外出する母親を追う、帰宅した母親を迎える、探索行動 (rooting) のために母親を利用する反応が現れ、同時に誰に対しても示された親密な反応は減少する。ある特定な人が二次的愛着対象人物 (subsidiary attachment-figures) として選択され、他の人たちは選択されなくなる。愛着人物は母親・父親・年長の同胞・祖父母であることが多い。愛着行動が無生物に向けられることがあり、ウィニコット (Winnicott, 1953) は「移行対象」 (transitional object) と名づけた。

乳児は成長するにつれて、見知らぬ人 (strangers) をみると恐れを示す「見知らぬ人への恐れ」 (fear of strangers) が現れる。これは8カ月までに出現するので、スピッツ (Spitz, 1965) は「8カ月不安」 (eight-months anxiety) と名づけ、これを真の対象関係の最初の指標であり、恐怖からかの逃避ではなくて、分離不安 (separation anxiety) の1つだとみた。しかしボウルビイは、8カ月の前から見慣れた人物の弁別および愛着行動があり、見知らぬこと (strangeness) 自体が不安の原因であるとして、スピッツの分離不安説に反対する。

第4段階 目標修正的な協調性の形成 : 乳幼児は原始的な認知図 (cognitive map) を用いて目標を修正することで、母性的人物は時間的、空間的に永続し、予測できる独立対象として考えられるようになる。母親の感情や動機について洞察できるようになると、3回目の誕生日前後に母子間に協調性 (partnership) という関係を発達させる基礎が形成される。

ボウルビイは、子どもの愛着のパターンを表す基準として、子どもが短時間母親によって置き去りにされるとき反抗の有無と反抗の強度をあげる。最初の誕生日頃にみられる愛着のパターンの多様性について、エインズワースらの実験 (Ainsworthら, 1969) を紹介している。この実験は、①おもちゃのある見知らぬ部屋で母子が一緒にいて、②1名の見知らぬ女性が加わり、③母親が見知らぬ人と乳児を残して立ち去り、④母親が戻り、⑤母親と見知らぬ人が乳児をまったく一人にして立ち去り、⑥見知らぬ人が戻り、⑦母親も戻るという場面が設定される。この結果、エインズワースは愛着の強度だけではなく、子どもの安全性 (security) の次元の評価も重視する。見知らぬ場面で見知らぬ人によって苦悩することなく、母親がいないときにも母親の所

在を推測し、母親が戻ると歓迎する子どもは、安全に愛着していると評価された。ボウルビイは、子どもの愛着を測定する安全性-不安定性 (insecurity) の次元がクライン (Klein, 1948) のいう「良い対象の投影」、エリクソン (Erikson, 1950) のいう「基本的信頼」の概念と関連しているともみた。

ボウルビイは「愛着行動は乳児期が過ぎると消えるのではなく、人間の一生を通して存在する」と繰り返し述べる。愛着行動に示される複雑な要素は、すべて設定目標 (set-goal) をもつ計画として組織される。その計画は環境および有機体に関する作業モデル (working models) に照らして案出され、その作業モデルは発達と同時に生じると推測している。

V. 『愛着人物との分離』 (1973)

ボウルビイは第Ⅱ巻“Separation” (1973) で、「愛着人物との分離」に伴う不安や恐怖を取り上げ、不安性愛着の精神病理を追究する。

1. 安全 (security)、不安 (anxiety)、苦悩 (distress)

ボウルビイは「人間の悲しみの原型」として愛着人物との分離を考える。母親と分離されて施設で保護されている子どもには、反抗、絶望、脱愛着と名づけた一連の反応が起きるが、こうした反応を示さないのは、かつて愛着人物を持った経験のない子どもか、反復的に長期的な離別を経験したために恒久的な脱愛着感をもつ子どもであった。母親と分離された乳幼児の反応の強度を軽減する条件は、①親しい仲間や好きな持ち物、②母親代理者による母性的養育である。

ここで用語を定義すると、母性的人物 (mother figure) とは子どもが選択的に愛着行動を向ける人物、母親代理者 (substitute mother) は子どもが一時的に愛着行動を向ける人物である。愛着行動が向けられる人物を包括する術語として、愛着人物 (attachment figure)、または扶養者 (support figure) が用いられる。そういう人物が存在 (presence) するというのは容易に接近し得ること、不在 (absence) とは接近し得ないことを意味する。分離 (separation) とは愛着人物に一時的に接近し得ないこと、喪失 (loss) とは永久に接近し得ないことと定義される。

ボウルビイは精神病理学における分離と喪失の意味を考察し (第2章)、反抗の段階は分離不安 (separation anxiety) と関連し、絶望は悲痛 (grief) と悲哀 (mourning) に関連し、脱愛着は防衛と関連し、これらを1つの過程の諸相だと理解する。フロイト (Freud, 1926) が晩年になって、不安は対象喪失の危険性に対する反応、悲哀は対象喪失の事実に対する反応、防衛は不安と苦痛に対する方法とみたのをボウルビイも採用する。しかしフロイトにとって分離不安の位置は不明瞭であり、神経症の原因としてどの程度作用するかは不明なまま残されたと指摘する。

2. 人間の恐怖に関する比較動物学的研究

ボウルビイは「不安と恐怖の理論における基本的仮説」 (第5章) として、まず精神分析理論を取り上げる。フロイト (Freud, 1926) は、不安がよくわかっている危険の場合は「現実的不安」、それがわからないものに関する不安を「神経症的不安」と呼び、一人でいるとき、暗闇にいるとき、見知らぬ人といるときに持つ恐怖は神経症的と判断した。クライン (Klein, 1946) は、恐怖は生活体の内部にある死の本能が働いて起こり、絶滅の恐怖として感じられ、迫害に対する恐怖の型をとると考えた。それに対してボウルビイは、日常場面で見られる恐怖は人間の本来の特質であり、進化論的にみれば病理的なものではないとした。

ボウルビイは「恐怖の行動形態」 (第6章) を検討し、愛着行動は恐怖行動のなかに分類され

ているところの1構成要因とみなし得るという。恐れを誘発しそうな人物または対象から距離を増大する行動は、撤退 (withdrawal)、逃避 (escape)、回避 (avoidance) ということばが適切であり、愛着行動と撤退行動とはしばしば同時に発生すると指摘する。愛着行動と撤退行動が葛藤するのは、愛着人物そのものが脅威あるいは暴力を誘発する場合である。

ボウルビィは「恐怖を誘発する事態」(第7章)で、見知らぬ人への恐怖 (fear of strangers) を取り上げる。生後4カ月頃になると、多くの乳児は見知らぬ人を見ると泣き始めるが、6カ月を過ぎると弁別ができるようになり、恐怖という用語が適切になる。12カ月児ではなじみのないもの (unfamiliar objects) を確かめようとするとき、母親の方を振り向く。ボウルビィは「一般的には、母性的人物に対する愛着性は生後1年間の後半に着実に形成されると同時に、恐怖誘発刺激に対する撤退行動も現れ始める」という。

危険と安全に対する「自然的な手がかり」(natural clues)として(第9章)、ボウルビィは未知性 (strangeness) と孤独でいること (being alone) をまずあげる。人間は見慣れた (familiar) 人や場所にとどまるという傾向があり、個体が熟知した環境との間に安定した関係を維持することは、生理学上のホメオステシスとほとんど同じく自動的に生じるという。

次にボウルビィは、子どもが生後2年目以後に、恐怖に対して学習する「文化的てがかり」(cultural clues) に言及し(第10章)、成人が現実の危険のみを恐れるという仮説はもっともらしいが、明白な誤りであると主張する。現実の危険を定義するのは困難であり、危険を正確に予測することも困難である。しかし、われわれは自然的手がかりが同時に存在する複雑な事態に対しては、特に強く反応する。動物恐怖、暗闇恐怖は自然的てがかりの源泉となることが多い。災害時には家族がびったり寄り添うのが普通であるが、「この愛着行動を説明するのに退行の概念が用いられるのは残念だ」と述べる。

恐怖が現実の事態に適していないと思われる場合、精神分析は投射の概念を用いた(第11章)。クラインの見解では、生後1年の乳児は自分自身に属する衝動を親の属性とみなすのが常であり、このような誤った起因の仕方によって、歪められた親を自我の中に取り組んでいく。これに対してボウルビィは、「クラインの思考体系は個人の過去あるいは現在の実際経験から注意をそらせ、環境からの影響を受けないような閉鎖的体系として個人を扱っている」と批判する。

ボウルビィは「分離の恐怖」(fear of separation) を検討するなかで(第12章)、2つの用語の必要性を論じ、恐怖感情と対照的な安心感 (feeling secure) と、危険事態と対照的な安全事態 (situation of safety) をあげる。安心は感情に反映された世界に適用され、安全は危険のない現実の世界を表す。

3. 恐怖に対する感性の個人差

ボウルビィは恐怖に対する感性を規定する要因として、愛着人物の存在・不在が決定的な要因であることを取り上げる(第14章)。愛着人物が存在することはそれに容易に近づき得て、愛着人物が応答することを意味し、不在とは愛着人物に近づき得ないことを意味する。ボウルビィは「各個人は世界と自己についての作業モデルを構築して、その作業モデルに助けられて出来事を知覚し、未来を予測し、自分の計画を作る」と仮定し、その作業モデルにおいて重要な点は、「その人の愛着人物が誰であり、その人物がどこにいるか、その人物にどのような反応を期待できるか、についての考えである」と強調する。この公式化は、これまでの「対象の取り入れ」とか「自己像」という考えをシステム理論で言い換えたものである。

第15章から、不安性愛着 (anxious attachment) が取り上げられる。これは愛着人物が近づきがたくて応答されないことを恐れての不安であることを示しており、不安定性愛着 (insecure at-

tachment) とも呼ばれ、ボウルビイは「過剰依存」「分離不安」という用語を使わない。

ボウルビイは不安定性愛着の例として、子どもの学校恐怖症 (school phobia) または登校拒否 (school refusal) を取り上げる (第18章)。彼らが恐れているのは家を離れることであるから、学校恐怖症や分離不安という用語は不適當であるとする。多くの事例で、親自身が愛着人物に不安をもっており、無意識のうちに子どもに親の姿を求めて、自分自身は子どもの役割をとるといふ、親子関係の逆転がみられる。こうして子どもは親を愛するように期待され、親は子どもに愛され慰めてもらうことを求める。しかし母親は子どもこそ特別な世話が必要だと主張し、経験の未熟な臨床家は子どもが「甘やかされている」と信じるのだという。ボウルビイは、母親と母方祖母祖父についてはよく触れられているが、父親と父方祖母についても同じダイナミックスが起り得ることを指摘している。登校拒否児の夫婦関係も一般に不安定である。妻が妻の母親および登校拒否児のそれぞれとアンビバレントな関係にあり、夫は父親として役割を放棄しがちな受身的な人であることが多い。母親が自分にしたと同じように夫を支配する女性と結婚生活を続けられるのは、受身の男性にほかならない。これとは反対に、夫が母親との関係で混乱し、妻が受身の場合も起り、親自身の不安性愛着が子どもとの関係においてアンビバレントな関係を生じさせる。登校拒否児の両親を精神医学的に調査してみると、全般的に精神障害の率が高く、結婚生活の不調和が共通して認められるという。

次に不安性愛着と広場恐怖 (agoraphobia) との関連が取り上げられる (第19章)。広場恐怖を検討すると、学校恐怖との類似性があり、両者ともに人込みに行くのを恐れ、不安発作・抑うつ・心身症を示し、依頼心が強く、患者の親が神経症に悩んでいることが多い。ボウルビイは、広場恐怖患者の家族関係が登校拒否児のそれと類似すると考え、この恐怖症を不安定な家族関係から生じる不安性愛着の観点から理解した。つまり、「愛着人物が自分をいつでも受け入れてくれるかどうか、はっきりしない個人は、恐怖を喚起する可能性のある事態に直面すると、愛着人物に安心感と信頼感をもっている人よりも、強い恐怖反応を示しやすい傾向がある」とみた。

他方、安定性愛着 (secure attachment) が安定した自立心 (self-reliance) のあるパーソナリティを形成する基礎となることが論じられる (第21章)。性格の成熟と家族関係においては、ほとんど完全な相関関係が見られるという。信頼されている人間は安全基地 (secure base) となり、そこから行動がとれ、その基地に対する信頼度が増大するほど、健康な自立心が育つという。

最後にパーソナリティの発達を取り上げられる (第22章)。これまでの精神分析の発達理論は固着や退行という程度によって測定されていたが、ボウルビイはいくつかの「発達経路」 (developmental pathways) のうちのある経路をたどって発達するというモデルを採用する。選択される経路は生活体とそのときの環境との相互作用で決まり、愛着人物との分離や喪失の経験はすべて発達に作用し、発達経路が変わると考える。

VI. 『愛着対象喪失』 (1980)

ボウルビイは第Ⅲ巻“Loss” (1980) において、「愛着対象喪失」によって引きおこされる、子どもと成人の悲哀の過程を比較検討し、人生の初期と後年にみられる反応とに多くの共通点があることを指摘する。悲哀 (mourning) とはフロイト (Freud, 1917) によって用いられた用語で、ボウルビイは「愛する人物の喪失によってもたらされる広範囲な心理過程」として用いる。

1. 成人の悲哀

ボウルビィは近親者を失ったときの個人の反応として、一般的に数週間から数カ月の間に、次のような全般的な順序が認められるという。①数時間から数週間連続する無感覚な段階、非常に強い苦悩や怒りで終わることもある。②失った人物を思慕し探し求める段階が数カ月、ときに数年続く。③混乱と絶望の段階。④さまざまな程度の再建の段階。

ボウルビィは愛着人物に対する生前の関係が死別者の情緒的生活に継続して中心的な役割を果たすことや、数カ月から数年経過するにつれて生じる変化について関心をもつ。悲哀が病的な経過をとる成人は、死別する以前にある特別な種類の愛情関係を持つ傾向があるという。そのうちの第1グループは、アンビバレントな感情が併存している重度な不安性愛着を特色とする愛情関係である。第2グループは強迫的に他人を保護する傾向をもつ人で、このタイプは神経質で過度に依存的であり、固執的かあるいは気が変わりやすく、神経症的とみなされており、このタイプもアンビバレントな感情が併存している。

精神分析では、愛着対象喪失のあとに抑うつ障害を示す人は、子どものときから愛着人物との間に不安とアンビバレントな感情が併存する関係を形成する傾向があり、抑うつ患者が退行する固着点 (fixation point) を理解しようとしてきた。ボウルビィは、愛着対象喪失に対して健全な様式で反応する能力が、順調に発達するならば幼い時期に獲得されるはずであるとして、「子どもが最早期に好ましい発達をしているならば、のちに分離が起こったときの反応は健全なものであろう」と推論する。この仮説は問題の時期が1歳の誕生日以前あるいはその直後に生じると考えられているから、好ましい発達をしている子どもは、第2年目、第3年目に直面させられる愛着対象喪失に対しても健全な反応をするであろうと予測する。

ボウルビィの見解では、不安性およびアンビバレントな感情を併存する愛着を形成しやすい子どもは、その親自身が自分の子ども時代の経験や結婚生活から、愛情や養育に対する子どもの要求に耐えられず、無視する、叱る、説教する傾向があることが立証されているという。その結果、子どもは愛情と保護を望みながらも無視されるか棄てられるのではないかと不安になり、親の注目と愛情の欲求を増大し、一人で残されることを拒否し抵抗するのだとみる。

強迫的保護願望を引き起こしやすい子ども時代の経験については系統的な研究がなされていないが、登校拒否や広場恐怖の研究から、2つのタイプが見いだされるという。1つは、幼児期に断続的で不適切な母性的養育を受け、それが遂には完全な喪失に至る可能性がある。もう1つは、病気にかかっていて心配性の親、あるいは心気症的な親の看病を強いられた場合で、子どもは親の病気に責任があり、したがって面倒をみる義務があるように感じさせられている。

こうした研究から、愛着対象喪失に対する反応の主要な決定因は、その人の愛着行動とそれに伴うすべての感情が、乳児、幼児、青少年期を通じて、親によって評価されて対応してきた様式であるという仮説が生まれた。

2. 子どもの悲哀

ボウルビィの関心は、「児童や青年は、親の喪失による悲しみの経験から、その後の人生にしこりを残すことなく立ち直れるものであろうか。もしもそれが可能であれば、それは何歳頃からであろうか」という問題である。そこで2、3歳頃の喪失体験を考察するために、3歳以降青年までを対象にして、両親の死による愛着対象喪失、それに対する反応が検討された。

ボウルビィは、親の死後の状況が好ましい場合、4、5歳の子どもの悲しみにおいても成人と同様に、死んだ人の思い出とイメージを持ち続けること、あるいは思慕と悲しみを繰り返す味わうことが一般的特徴であり、年長の子どもの青年もまた同様であると結論する。しかし、子ども

の悲哀と成人のそれとの間には相違もあり、児童期の方が環境の影響を受けやすい。たいていの成人は愛着対象の人物が持続的に存在しなくとも生きるすべを知っているが、子どもはこのような経験をもっていない。しかし、成人よりも子どもの方が現在の世界に生きやすい傾向をもっているのは、幼児が過去をうまく思い出すことができないことに起因しているとみる。子どもが経験する問題点の大部分は、生き残った親の行動が子どもに直接与える影響であるという。

児童期や青年期に親と死別した人は、そうでない人に比べて精神医学的障害（自殺や抑うつ）になる危険性が高い。ボウルビイは、初期の愛着対象喪失は個人を敏感にし、その後を経験する愛着対象喪失やその恐れに対して、傷つきやすくすると指摘する。愛着対象喪失後、精神医学的障害にかかった者は、喪失後に親から不十分な養育を受けた傾向が見いだされ、親の死後の家族関係の型に大きく左右されるという。ボウルビイは種々の報告例からみて、子どもの不安、自己非難、およびその他の症状や問題の背後には、現実生活の恐ろしい経験や、自責を誘発させる経験による影響が続いているという仮説をもつ。

ボウルビイは初期の認知的観点について、ピアジェ (Piaget, 1937) の理論を援用して、生後1年目の後半から2年目の前半にかけて、乳児が独自性をもつ存在物として事物を理解することを、事物永続性の概念 (concept of object permanence) を獲得するという。ピアジェは乳児の人間に対する知識が事物に対する知識よりも早く発達すると述べ、ボウルビイは識別された母性的人物に対する乳児の愛着性が生後4カ月から7カ月の間で急速に発達するとみる。自己の発信が母親によって敏感に応答される安定した子どもは生後10カ月から12カ月になると、母親が見えなくても必要なときにはいつでも側にきてくれることを納得して、しばらくの間、母親不在の場でも一人で楽しく遊ぶことができる。つまり、人間永続性の概念 (concept of person permanence) が発達する。18カ月以上の子どもの大部分は、象徴的に外的世界を操作できるようになり、過去の行動を再生し、未来の行動を予測できるといふ。

児童期の悲哀を論ずる場合、これまでの精神分析学者は対象恒常性 (object constancy) を提起し、ときにはリビドー的对象恒常性 (libidinal object constancy) にまで拡大した。これらを獲得するという年齢は生後6カ月から2歳後期までの広がりがあり、ボウルビイは従来の精神分析が事物永続性と人間永続性とを区別せずに「対象」を論じていると批判する。マラーラ (Mahlerら, 1975) がいう、2歳後期にみられる子どもの分離・個体化行動は、ボウルビイの考えでは安定性愛着の概念で理解できるとした。ボウルビイは、分離と喪失に対する反応の決定に及ぼすのは人間永続性概念の役割であると強調する。

乳児が見えなくなった場所を探すように、亡くなった人がいた場所は喪者に安定感と慰めをもたらす。人間は特定の場所と深く結びつけられている。ボウルビイは生後16カ月以上の幼児には悲哀に耐える初歩的能力へと発達する基盤が備わっているとみる。最後に彼は「あらゆる年齢において、人間の家庭生活の型が、喪失に対する反応様式にどれほど深刻な影響を及ぼすものであるかということを示す証拠ほど、私の心を深くとらえたものはなかった」と締めくくる。

VII. 愛着理論の現代的意義

ボウルビイの愛着理論に関する3部作は、非常に多くの報告例を引用するために大著である。その点2つの講演集 (1979, 1988) は彼の主張が明確である。まず彼自身が自説をどのように評価しているかを明らかにし、その後で「愛着」と「甘え」について検討し、現代における愛着理論の意義を考察する。

1. ボウルビィ自身の評価から

ボウルビィは愛着理論を論じる際に、自分の立場は「精神分析学の枠組みの中にある」と言いながら、研究方法を延々と論じている。ボウルビィ（1988）は、精神分析を「精神分析療法という技術」と「精神分析的心理学という科学」の2つに分け、精神分析という言葉をあいまいに使うことが大きな害をもたらしたと考えて「自然科学としての精神分析」という立場を取り解釈学を拒否した。科学者としてのボウルビィ（1979）は、ローレンツの比較行動学、ダーウィンの進化論、ピアジェの認識論、それに学習理論の方法をとることを明言している。

ボウルビィの講演集（1988）の序文に「愛着理論は一臨床家が情緒障害をもつ患児と家族の診断と治療のために公式化したものであるのに、これまでのところ、主として発達心理学の研究を進めるために利用されている。私はこうした研究の知見をパーソナリティの発達と精神病理についての理解を大いに深め、また臨床的にも非常に重要性をもつものとして歓迎するが、臨床家がこの理論の臨床的適応を検討することにあまりに遅々としているので失望してきた」とある。ボウルビィは失望の理由が、彼自身が臨床家よりも研究者・理論家という立場を取ったことに起因していることに気づいていないように思われる。

パーソナリティ発達理論についていえば、フロイト理論では、個人は一連の発達段階を通り、その段階のいずれかに固着したり退行したりするというモデルであるが、愛着理論においては、個人は並んだいくつかの可能な「発達経路」のうちの1つに沿って発達していくというモデルに置き換えられた。ボウルビィ（1988）の発達経路のモデルは、アンナ・フロイト（Freud, A., 1963）がいう複数の「発達ライン」をモデルにしたとみられ、乳児は潜在的にいくつかの経路が開かれているが、そのときの環境において、人との交渉によって規定されながら進んでいくと考える。感受性があり、応答的な親をもつ子どもたちは健康な経路に沿って発達することができるが、そうでないと逸脱した経路にそって発達するとみる。こうした発達の際、個人間の親密な情緒的絆を形成し、相互関係的経験の反復したパターンに基づいて形成される、自己や愛着人物に関する「ワーキングモデル」を利用すると仮定されている。ワーキングモデルの概念は精神分析の「内的対象」に代わるもので、認知心理学の影響がみてとれる。

愛着理論では両親の役割が非常に重要で、ボウルビィ（1988）はエインズワースのストレンジ場面法（strange situation procedure）の評価を重視している。これにより愛着性が、子どものサインに敏感に応答する安定した愛着パターン、子どもの援助に不確かな不安性愛着パターン、子どもの援助を拒絶することも予測される不安回避性愛着パターンに分類される。標準から逸脱したパターンを示す事例は臨床的に注意が向けられているが、生後12カ月の時に評価された母子の愛着パターンは、3年半後、5年後でも予測可能であったという。

このように愛着理論は発達心理学者に大いに受け入れ、研究が進められてきた。それに対してボウルビィ（1988）の治療論は乏しく、エインズワース（Ainsworth, 1982）が提案した「安全基地」（secure base）を患者に与え、そこを基点として、患者は人生のさまざまな不幸で苦痛に満ちた側面を探索するというものである。他方、精神病理学におけるボウルビィの貢献は、病的悲哀の結果としての成人の精神障害の起源が、乳幼児期および早期小児期における喪失による病的な悲哀の過程と関連するとみたことである。ボウルビィの前に、乳幼児期と成人の悲哀を関連づけたのがクラインである。クラインの考える病因的な喪失はすべて生後1年間の事象であり、そのほとんどが授乳と離乳に関連しており、攻撃性は死の本能の表現とみなされ、不安はその投影の結果である。ボウルビィ（1979）はこの見方に反対し、クラインのいう「抑うつ態勢」が後年の喪失に対して、なぜ一部の人が健全な悲哀反応を示し、他の人が病的悲哀反応を示すのかをよく説明していないと批判する。ボウルビィは、「失われる最も重大な対象は乳房ではなく、母

親自身（ときに父親）であり、傷つきやすい時期は生後1年間だけではなく、小児期の数年間にわたるものである。親を失うことは最初の分離の不安と悲嘆を引きおこすだけではなく、再結合させる機能をもつ攻撃性が悲哀の過程をも引きおこす」と説明している。

2. 「愛着」と「甘え」について

ボウルビイ（1969）は本能的行動を比較行動学の見地から徹底的に見直し、本能的行動も「適応性のある環境」で影響を受けるとみる。フロイトの本能論は閉鎖系なのに対して、ボウルビイのそれは開放系である。ボウルビイは、母と子どもの絆が食本能を満たすから生まれるというフロイトの「二次動因説」を否定し、特に母親との相互作用の結果として、乳児の中に他者を求める接近行動が生まれるとし、これを「愛着行動」を呼んだ。愛着行動は乳幼児期に発達する本能的行動であるが、この機能は本来捕獲者からの保護と考えられている。ボウルビイ（1979）は、愛着行動が成人になってからも活動し続け、血縁者、雇用者、年長者にも向けられ、人間の本能の正常かつ健康的な部分とみなされるので、「退行」とか「依存」という言葉で評価するのは誤解を招くと主張する。依存については「依存には接近関係の維持と特別な関連はないし、特定の個人に向けられるものでもないし、長期的な結びつきを意味しているわけでもなく、強烈な感情に結びついているわけでもない。依存には何ら生物学的機能も想定されていない」という。

ここで「甘え」理論の提唱者土居健郎が「愛着理論」をどのように評価しているかをみよう。土居（1987）はボウルビイの仕事は大変好きだと述べた後、幼児の最初の認知がfamiliarとstrangeを区別するという指摘に注目し、familiarという認識は同一性の認識を前提とすると述べる。そして「『甘え』というのは一次的には、馴染んでいる状態の時に起きる感情であり、二次的にはこのような感情を経験したいという欲望である」と説明する。ボウルビイが愛着を依存から峻別したことについて、土居（1997）は、「彼は愛着がそれ自体依存をもたらずという事実を見過ごしたように思われる。甘えはまさに心理的依存を含む故に、また愛着に比して行動よりも感情をさす故に、言葉としてはむしろ愛着よりも有利なのではなかろうか。結局、逆説的に言えば、『甘え』概念はふつうコミュニケーションでは言語化されないものを論ずることを可能にするというわけだ」と指摘している。また、土居（2001）は「attachmentを『愛着』と訳すと『甘え』とほとんど見分けがつかない。しかし注意してほしいのは、アタッチメントはくつつくことをさす言葉であって、語自体にはもともと感情的意味が含まれていないことである」とも述べる。ここからわかるように、「愛着」と「甘え」はほぼ同じ概念とみてよいが、ボウルビイは比較行動学から展開したことで、行動に重点があるという違いが生まれている。加えて、「愛着」は子どもの行動に重点が置かれているが、「甘え」は相手との関係に左右される。アンビバレント型の愛着類型は、甘え理論では「屈折した甘え」と言えよう（小林・遠藤，2012）。

3. 愛着理論の現代的意義

ボウルビイは一貫して母子関係を重視してきた。母子をつなぐものが「愛着」であり、「甘え」である。「甘え」とほぼ同じ概念にバリエーションの「一次愛」があり（中野，2016）、土居（2001）はコフト（Kohut）のいう「自己対象」（selfobject）も「甘え」に相当する概念であると指摘している。愛着は決して最初のオリジナルな概念ではないが、ボウルビイは比較行動学を駆使したことから説得力があり、世界中にインパクトを与えたと言えるであろう。ボウルビイは研究者であるが、同時に「母子関係が精神衛生の根本である」と主張する啓蒙家でもあった。子ども虐待が急増する今日にあって、ボウルビイが注目される理由がここにある。

愛着研究が親のワーキングモデルを評価することに発展したことも特筆すべきことであろう。

メインら(Mainら, 1985)が考案した成人アタッチメント面接(Adult Attachment Interview: AAI)は、無意識を呼び起こして自己表出させる半構造化面接で、①母親との愛情的結びつき、②父親との愛情的結びつき、③両親との役割逆転の有無、④思い出の質、⑤両親への怒り、⑥親子関係についての理想、⑦親子関係についての幻滅、⑧談話内容の一貫性、という8スケールに従って評価される。ここから愛着に関する精神状態は、自律安定型(autonomous-secure)、愛着軽視型(dismissing-detached)、とらわれ型(preoccupied-entangled)、未解決型(unresolved-disorganized)という4つのカテゴリーに分類される。妊娠中の親にAAIを実施し、その結果から満1歳児のストレンジ場面法で分類される乳児の愛着型を予測できることが実証され、AAIは母親の感受性(sensitivity)を予測できるといわれている(Fonagy, 2001)。こうした結果は、精神衛生的な予防介入の可能性を示唆する。

このように愛着理論は母子臨床に大いなる貢献ができる可能性を秘めている。しかしボウルビィはバリントや土居と違って、この理論の治療論を提出できなかったのみならず、精神分析との間に溝をつくってしまった。フォナギー(Fonagy, 2001)は愛着理論と精神分析を繋ぎ、愛着理論が臨床に向かう方向性を見出そうとしている。愛着理論と精神分析理論との間に多くの共通する概念がある。例えば、マラーら(Mahlerら, 1975)のいう分離-固体化の練習期(9~17カ月)と「情緒的燃料補給」を求めて母親に戻る乳児の行動は、ボウルビィのいう「安全基地」現象と類似しており、観察の視点が母子分離とみるか母子接近とみるかで2人の理論に相違が生まれたのであろう。フロイトのいう性欲動とは別に対象を求める欲求の概念は、既述したようにボウルビィのオリジナルではない。バリントのいう「一次愛」の傷つきから生まれる「オクノフィリックな態度」(重要な他者にしがみつく)は不安型-とらわれ型の愛着であり、「フィロパティックな態度」(対象を求めず自他の空間を愛する)は回避型-愛着軽視型のパターンに相当するとみられる。ボウルビィは愛着人物が「安全基地」になることを強調したが、サリヴァンがすでに対人関係論の基本概念の中に「不安と安全」を入れている(中野, 2007)。コフトのいう「自己対象」は愛着人物そのものであり、ボウルビィのいう母親の応答性は共感とミラーリング(映し出し)に相当するであろう(中野, 2013)。

こうしてみると、対象を求める欲求に関する精神分析理論と愛着理論を繋いで治療論を展開することが今後期待される。ボウルビィは英国精神分析学会の中では異端者であったかもしれないが、現代の精神分析を対象関係論の方向に舵をきる船頭の役割を果たした人といえるであろう。

文 献

- 1) Ainsworth, M., and Wittig, B.A. (1969). Attachment and exploratory behaviour of one-year-olds in a strange situation. In *Determinants of Infant Behaviour*, Vol. 4, ed. B.M.Foss. London: Methuen.
- 2) Ainsworth, M. (1982). Attachment: retrospect and prospect. In C.M. Parkes and J. Stevenson-Hinde (eds), *The Place of Attachment in Human Behaviour*, 3-30, London: Tavistock.
- 3) Bowlby, J. (1951). *Maternal Care and Mental Health*. World Health Organization. 黒田実郎(訳) (1967). 乳幼児の精神衛生. 岩崎学術出版社.
- 4) Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol. 1 Attachment*. London: Hogarth Press. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子(訳) (1976). 母子関係の理論①愛着行動. 岩崎学術出版社.
- 5) Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol. 2 Separation: Anxiety and Anger*. London: Hogarth Press. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) (1977). 母子関係の理論②分離不安. 岩崎学術出版社.
- 6) Bowlby, J. (1979). *The Making & Breaking of Affectional Bonds*. London: Tavistock Publications. 作田勉(監訳) (1981). ボウルビィ母子関係入門. 星和書店.

- 7) Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss, Vol. 3 Loss: Sadness and Depression*. London: Hogarth Press.
黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 (訳) (1981). 母子関係の理論③愛情喪失. 岩崎学術出版社.
- 8) Bowlby, J. (1988). *A Secure Base: Clinical applications of attachment theory*. London: Routledge. 二木武 (監訳) (1976). 母と子のアタッチメント 心の安全基地. 医歯薬出版社.
- 9) 土居健郎 (1987). 「甘え」の周辺. 弘文堂
- 10) 土居健郎 (1997). 「甘え」理論と精神分析療法. 金剛出版
- 11) 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造. 弘文堂
- 12) Erikson, E.H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton. 仁科弥生訳 (1977). 幼児期と社会. みすず書房.
- 13) Freud, A. (1963). The concept of developmental lines. *Psychoanalytic Study of the Child* 18, 245-265.
- 14) Freud, S. (1917). Mourning and Melancholia. *S.E.*, 14, 243-258. 井村恒郎・小此木啓吾訳 (1970). 悲哀とメランコリー. フロイト著作集6 人文書院 pp137-149.
- 15) Freud, S. (1926). Inhibitions, Symptoms and Anxiety. *S.E.*, 21, 237-260. 井村恒郎・小此木啓吾訳 (1970). 制止, 症状, 不安. フロイト著作集6 人文書院 pp320-376.
- 16) Fonagy, P. (2001). *Attachment Theory and Psychoanalysis*. London: Cathy Miller Foreign Rights Agency.
遠藤利彦・北山修 (監訳) (2008). 愛着理論と精神分析. 誠信書房.
- 17) Holmes, J. (1993). *John Bowlby & Attachment Theory*. London: Routledge. 黒田実郎・黒田聖一 (訳) (1996). ボウルビイとアタッチメント理論. 岩崎学術出版.
- 18) Klein, M. (1946). Notes on Some Schizoid Mechanisms. In Klein et al., *Developments in Psycho-analysis*. London: Hogarth.
- 19) Klein, M. (1948). *Contributions to Psycho-analysis 1921-1945*. London: Hogarth.
- 20) 小林隆児・遠藤利彦 (編) (2012). 「甘え」とアタッチメント. 遠見書房.
- 21) Lorenz, K. (1983) 日高敏隆 (訳) (1998) : ソロモンの指輪—比較行動学入門. 早川書房.
- 22) Mahler, M.S., Pine, F., and Bergman, A. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant: Symbiosis and Individuation*. New York: Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化. 黎明書房.
- 23) Main, M., Kaplan, K. and Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood and adulthood. A move to the level of representation. In Growing points of attachment theory and research. I. Bretherton and E. Water (eds), *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- 24) 中野明德 (2007). H.S. サリヴァンの人格発達理論 福島大学心理臨床研究, 2, 1-8.
- 25) 中野明德 (2013). H. コフートの自己愛論—自己心理学への展開. 福島大学総合教育研究センター紀要, 15, 25-34.
- 26) 中野明德 (2014). 土居健郎の臨床論—人間理解の方法と「甘え」理論. 福島大学心理臨床研究, 9, 1-12.
- 27) 中野明德 (2016). マイケル・バリントの「一次愛」論—土居健郎の「甘え」理論と比較して. 別府大学大学院紀要, 18, 21-38.
- 28) Piaget, J. (1937). *The Construction of Reality in the Child*. New York: Basic Books.
- 29) Spitz, R. A. (1965). *The First Year of Life: A Psychoanalytic Study of Normal and Deviant Development of Object Relations*. New York: International Universities Press.
- 30) Winnicott, D.W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena. *Int. J. Psycho-Anal.*, 34, 1-9.